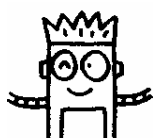


すぎたげんぱく かいぼう
杉田玄白は、どこで、だれを解剖したの



江戸郊外の千住の小塚原で、死刑になった罪人の
死体解剖に立ち会ったんだよ。

おばまはん 小浜藩の江戸やしきの医者（藩医）だった杉田玄白は、藩に、オランダの解剖書「ターヘル・アナトミア」を買ってもらいました。その後、町奉行所に、解剖をしたい、という願書を出しました。1771年3月、その奉行所から、「明日、千住の小塚原の刑場で腑分け（解剖）を行うから、立ち会いたいなら来なさい」という連らくがありました。玄白は、同僚の中川淳庵と前野良沢をさそいました。

千住の小塚原の刑場で、罪人の死体解剖に立ち会った

翌日、3人は小塚原の刑場に行って、死刑になった罪人の死体解剖に立ち会い、内臓や骨格を「ターヘル・アナトミア」と見くらべ、その本の解剖図が正確なことを知りました。帰るとちゅうで、3人は、「ターヘル・アナトミア」を日本語に訳した本を出すことを、約束し合いました。小塚原は、今の東京都荒川区南千住にあった地名で、江戸時代には、罪人の死刑を行う刑場があったのです。解剖された罪人の名前は、伝わっていません。

山脇東洋が、日本で最初の解剖を行った

日本で初めて、解剖が行われたのは、1754年のことです。これは、京都の医者の山脇東洋が、京都所司代に願書を出したことから、京都の六角獄舎で行われたものです。東洋は、解剖に立ち会い、観察した結果を、「蔵志」という本にして発行しました。このときの解剖や、小浜藩に「ターヘル・アナトミア」を買ってもらったことが、玄白の、解剖をしたい、という気持ちを高めたのです。

玄白が書いた「蘭学事始」に出てくる「骨ヶ原」は、小塚原のことだよ。



ことばの意味 京都所司代 京都で朝廷や関西地方を監視する役目の、幕府の役職。